

松下幸之助氏の経営のコツ(つづき)

前号につづいて松下幸之助氏の経営に関することばをご紹介します。

企業は社会の公器

創業して数年後、税務署の職員が順調に成長する松下電器を調査に来たが、見解の相違で申告以上に利益が上がっていると指摘された。幸之助さんは、二晩眠れぬままに思案にくれた末「よく考えてみると、この金はもともと国家のものだ」という考えに至った。すると悩みは解消し、翌日「必要なだけ取ってください」と税務署の職員に申し出た。その一言で、その後の調査は簡単に済んだという話がある。この発想はその後、巨額の資本を集め、広大な土地を占有し、天下の人を擁して事業を営む企業は、形は株式会社、私企業であっても、本質は世間のもの、公器であるという考えとなり、さらに公器が赤字を生むのは罪悪であるという確信にまで発展した。

ダム経営

事業経営は、いついかなるときでも健全に発展していかなければならないが、現実にはさまざまな経済要因に左右されてなかなか難しい。しかし、幸之助さんは「それはやり方次第で可能なこと」という。その一つの方法が“ダム経営”である。ダムは河川の水をせき止め、蓄えることによって季節や天候などに影響されることなく、常に一定量の水の供給を可能にする。そのダムの如く経営にも設備、資金、人員、在庫、技術、企画や製品開発など、あらゆる分野に的確な見通しに基づいた適正な余裕をもてばよいというのである。この余裕は一見ムダのように見える。しかし、このムダは経営の安定的な発展を保証する保険料なのである。

社員に夢を語らない社長は失格

社長時代の幸之助さんは、何年後に会社の規模をこの位に、売上はここまで伸ばしたいと、事あるごとに将来の会社の姿を社員全員の前に公表していた。それは例えば、昭和31年の5カ年計画であり、35年に発表した「5年後に週5日制導入」の計画である。当時は例え社内の話に限っても、社外に計画が漏れるのを恐れて社員への公表を差し控える企業が少なくなかった。しかし、それを承知で発表したのは「社員にしっかりした目標なり夢を持たせたかったからであり、またそれが経営者として正しい道だと信じたからだ」と後日語っている。幸之助さんは“夢を語る経営者”だった。その夢が社員に働き甲斐を与えたといわれている。

好きになる

幸之助さんは、成功する経営者と失敗する経営者の分かれ道は「経営が好きであるか好きでないかということに第一の要素がある。昔から“好きこそもの上手なれ”というが、これは一つの哲理だと思う」と言い切っている。自分の仕事を天職だと思うほどに、本当に好きになってこそ、新たな創意工夫も次々と生まれ、力強い信念、行動も生まれて、着実に成功への道を歩むことが出来るというのである。逆に「経営はいい仕事だと思っているし、意義ある仕事だと思っっている、実は自分はこの仕事が好きではない。社命なので仕方がないからやっているのだというようでは、仕事のコツはつかめない」とも言っている。

前号と合わせて「経営のコツ」を10項目ご紹介しました。ご意見、ご感想をお寄せいただければ幸いです。(藪野記)

出典：PHP 研究所 「いまだから松下幸之助」、1993年、THE 21 特別増刊号

編集後記

今号では冒頭に大学での10年間のアントレ教育の記事を載せました。教育の効果が現れるには時間がかかるというのが通説ですが、学生が起業だけでなく、中小企業についても理解を深め、男子だけでなく女子学生も中小企業のものづくり現場で働いてくれるようになればと願っています。(池田(隆))